

Four Quartets に見る鳥について

■
木村 博是

I. 序

T.S. Eliot の詩に度々現れる鳥が暗示するものを調べるのは興味深い。鳥の情報を知ることで、詩の本来の意味に気づかされることが少なからずあるからである。鳥のイメージが重要な内容を示し、意外にも多くのことを語っていることもある。Eliot の詩には次のような鳥が描かれている。

鳥	頻度	作 品
Sparrow	5	Cape Ann (p. 142)*, The Rock (p. 150)
Dove	4	Coriolan (p. 127), Difficulties of Statesman (p. 130) Four Quartets (p. 193, p. 196)
Thrush	4	Cape Ann (p. 142), Four Quartets (p. 172), Marina (p. 109) The Waste Land (p. 73)
Eagle	3	Ash - Wednesday (p. 89), The Rock (p. 147) Triumphal March (p. 128)
Owl	3	Four Quartets (p. 177), Song (p. 60), The Rock (p. 166)
Goose	2	Old Possum's Books of Practical Cats (p. 212) The Cultivation of Christmas Trees (p. 111)
Nightingale	2	Sweeney Among the Nightingales (p. 57) The Waste Land (p. 64)
Parrot	2	On a Portrait (p. 599), Portrait of a lady (p. 21)
Quail	2	Ash - Wednesday (p. 98), Cape Ann (p. 142)
Seagull	2	Cape Ann (p. 142), Four Quartets (p. 185)
Cock	1	The Waste Land (p. 74)
Crane	1	Dans le Restaurant (p. 51)
Crow	1	Rannoch by Glencoe (p. 141)
Gull	1	Gerontion (p. 39)
Kingfisher	1	Four Quartets (p. 175)
Petrel	1	Four Quartets (p. 183)
Plover	1	Ash - Wednesday (p. 98)
Raven	1	Sweeney among the Nightingales (p. 56)
Swallow	1	The Waste Land (p. 75)

1. 作品中のページは *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot* による。
2. (*) は 4 回使用されている。

この表に見られるように、19種類の鳥が描かれている。とりわけ Eliot の詩作の集大成である Four Quartets (「四つの四重奏」、1944年)において多く見られる。本論では Four Quartets に描かれている鳥、Dove, Thrush, Owl, Kingfisher, Petrel, Seagull について、それぞれがどのように描かれ、詩にどのような重要な意味を提示しているかを考察したい。

Four Quartets は、詩による四重奏として Burnt Norton (1935)、East Coker (1940)、The Dry Salvages (1941)、Little Gidding (1942) の順に発表されたものを一つにまとめて発表したもので、事実上、Eliot の詩作の最後を締め括るものである。それぞれの詩は Eliot と何らかの縁のある地名をタイトルにしている。Burnt Norton は Gloucestershire にある荘園の屋敷の名前に由来し、Eliot は 1934 年にそこを訪れている。East Coker は Somersetshire にある村で、Eliot の先祖が代々住んでいた所。The Dry Salvages は Massachusetts の Cape Ann 岬の岩礁群で、詩人が幼少の頃夏休みを過ごした場所。そして最後の Little Gidding は、Huntingdonshire の村で 17 世紀に Nicholas Ferrar が英国国教会の信仰を中心とする小さな共同体を作った。Charles I 世も 2、3 度訪れた。しかし折りの中で過ごした一族の生活も、Charles I 世が Cromwell の議会軍に敗れ 1647 年に終わった。このように 4 篇は地名が詩のタイトルになっていることから、時間の中に生きる人間が、土地やそれにまつわる歴史との係わりの中で、非時間(永遠)について瞑想する構成になっている。

Four Quartets は非時間、そしてその瞬間の意義について考える。非時間的瞬間というのが 4 篇の詩の背後にある理念で、それぞれの詩はその瞬間の意義の探求へと向かう。そしてその探求の際、Ackroyd が「私たちが見るのは一つの伝統の輪郭であり、それは見事に描かれて、幻影のようにちらちら光っているが、やがてそれは消えて、破局的なヨーロッパの戦争のサイレンが入りこんでくる。こうした 2 重傾向がこの詩の形式的秩序とそれ自体のもろさの不安げな暗示との間に、すなわち、この詩の雄弁な率直さと、その雄弁の表面化に隠されている Eliot の個人的な回想との間に見られ、この詩に力を与えている。」(p. 271) と述べているように、Eliot の個人的な体験や戦争が詩の非時間的瞬間の意義に深く関わっているのである。

2. Burnt Norton

Burnt Norton では非時間的瞬間、すなわち「回る世界の静止点」(“At the still point of the turning world,” Burnt Norton II) と定義される、時間の外なる束の間の非時間的瞬間に焦点を合わせ、時間を克服し一瞬光り輝く世界を発見しようとする。静止点とは常に

あって、それに接したいと願う人ならいつでも接することのできる、時間の中の非時間的瞬間である。過去・現在・未来という時間の中で時間からの開放を願い、非時間的瞬間に触れようとする主人公、私はツグミの案内でバラ園に入って行き、時間についての瞑想に耽るのである。

2.1. Thrush について

ツグミは典型的な春の鳥である。小さな斑点のある茶色の羽と夏に奏でる澄んだ歌声で、イギリス人なら誰でも知っている鳥である。Eliot は Marina で「霧に歌声を響かす森のツグミ」(The woodthrush singing through the fog) と言い、また Burnt Norton では、こだま(あったかもしれない過去の経験)のいるバラ園の庭園へと誘う「ツグミの惑わし」(the deception of the thrush) について次のように描いている。

Other echoes

Inhabit the garden. Shall we follow?

Quick, said the bird, find them, find them,

Round the corner. Through the first gate,

Into our first world, shall we follow

The deception of the thrush? Into our first world. (Burnt Norton I)

過去の経験の世界であるバラ園で、非時間的瞬間に到達できるだろうか、というテーマが探求される。バラ園は、こだまが住んでいるところで、今その跡をつけようとするとき案内役となるのが一羽の小鳥。この小鳥はツグミであるが、「早く、探して、探して」と、バラ園への案内役となって捕捉しがたい経験をすぐに捕らえるように促すのである。こだまは、その角を曲がったすぐそこにいる。これは、かくれんぼをしていると小鳥がやって来て、「角を曲がったところだよ」、と子供たちに教えてくれたように思い、「ツグミに欺かれたつもりで行ってみようか。初めての世界へ」と意を決してツグミについて行く、子供時代の経験として表されている。

「ツグミの惑わし」はツグミに騙された気分という意味合いも含み、ここでの案内役としてのツグミは欺きがちなもの、補足しがたいものだと考えられる。ツグミは Eliot の詩の中では美声の鳴き声として用いられているだけでなく、生命の象徴である。また『イメージ・シンボル事典』によれば、ツグミは現実と幻想の混合を企むが、そのことによって、この世での恩寵の使者になるという。(p. 638)

2.2. Bird (= Thrush) について

バラ園はすぐそこにあるのだが、ただそれが分からないのである。こだまの住む世界が象徴する無垢な原初の世界に入るには、ツグミの声に従わねばならない。しかも早く探さねば見失われるのである。バラ園のこだまが次のように描かれている。

There they were, dignified, invisible,
 Moving without pressure, over the dead leaves,
 In the autumn heat, through the vibrant air,
 And the bird called, in response to
 The unheard music hidden in the shrubbery. (Burnt Norton I)

こだまがバラ園にいた。しかしこれは過去の経験の諸相であり、まだ目には見えない。こだまは、「目に見えないが堂々たる風格で、秋の熱気、震える空気の中、枯葉を見下ろしながら、ふわふわと飛び回っていた」と、妖精の動作で描かれている。木の葉隠れにかくれんぼをして遊んだ思い出が甦り、子供たちの喜々とした声が聞こえる。この描写を Gardner は「初めての世界は子供の世界で、目に見えない堂々たる風格は大人で、子供たちが遊ぶのに安全で愛の世界を作り出している」(p. 83) と説明している。そして小鳥は「茂みの中にひそむ音のない音楽に答えて」声高く囀るのである。

木々の葉陰に多くの子供たちが遊んでいるのが見えたので、そちらの方へ行くよう、小鳥は次のように誘う。

Go, said the bird, for the leaves were full of children,
 Hidden excitedly, containing laughter.
 Go, go, said the bird: human kind
 Cannot bear very much reality
 Time past and time future
 What might have been and what has been
 Point to one end, which is always present. (Burnt Norton I)

茂みや果樹園で子供たちが、かくれんぼをしているイメージは、至福の状態を象徴する。しかし、小鳥は「さあ、もう行きなさい、真実も度を越すと人間には耐えられない」と言う。真実とは経験の内面に宿る意義のことで、経験の真相はあまりにも眩しすぎるから、いつもその経験の意義が示されていたのでは、人間にはどうも耐えられないものであ

る。このことについて Gish は「イメジャリーは、静寂、不動、不可視の感覚を作り出す。そして小鳥はそれを真実と呼ぶが、このビジョンの瞬間は経験としても陳述としても作用している。あらゆる特定の場所や時間から切り離されているように思えるのは、まさにここなのである。時間と非時間は接点がないままであるが、それでも非時間的経験の強烈さと確実さが遥かに肯定的な調子を与えている」(p. 98) と論じている。

2.3. Kingfisher について

Burnt Norton 第IV楽章は光のイメージと経験を結びつけ、心の奥深く感じられている要求を表現している。その要求は、その瞬間が過ぎ去っても意味が残り、隠されてもなお光は存在するという確信を求める要求である。Gish は「この詩は喪失を述べることから始まって鮮烈な意識の瞬間、光明であれ暗闇であれ、それを意識する瞬間が再び繰り返されるかどうかを問い、再認識する。鮮烈な光を反映しているカワセミの翼における自然界と実在との対比、その瞬間の喪失とそれを再現する要求が集約されている」(p. 102) と言う。

Fingers of yew be curled

Down on us? After the kingfisher's wing

Has answered light to light, and is silent, the light is still

At the still point of the turning world. (Burnt Norton IV)

カワセミの翼が「光で応え、やがて静まった後も、光はまだ回る世界の静止した一点にある。」と、カワセミの羽が光によって光に答え、静まりかえった後、光はまだ回る世界の中心にじっとしている。そしてしばしの平穏の風の後も生活は続いていく様子が描かれている。

カワセミのイメージは Burnt Norton I (p. 171)、バラ園の場面における2つのイメージ water out of sunlight (日光の水) / The surface glittered out of heart of light (水面が光の中心から輝いた) と結びつく。Eliot は小川か湖の畔の柳の下でこの鳥が一瞬さっと光ったのを、そしてその輝く青と白の羽が太陽の光線を捉え、「光に光で応える」鳥の翼を見たのであろう。夕方、太陽の光を反射している夜を告げる使者であるカワセミは全く適切である、と Bergsten は説明している。(p. 186)

『イメージ・シンボル事典』によれば、カワセミは風を表わす。(p. 377) カワセミは頭に美しい冠毛があり水中に飛び込んで魚を捕らえるのでこの名前がある。カワセミが翼に残照を美しく照り消して水に潜った後は、また静寂の世界になる。ここではカワセミも参

加した荘厳な日没劇に、日没の輝かしい神聖な非時間的瞬間が印象づけられ、あたりが静寂に包まれてくると、心の奥底ではまだ沈んだ日没の光が消えずに映っている。心が捉えた確かな光、これも静止点 (the still point) の一つの形象化である回る世界の中心をなす一点であり、時を超越し過ぎ去っても取り戻すことのできる至福の瞬間である。そしてその瞬間を可能にするのが、カワセミも参加した静寂の世界である。

3. East Coker

East Coker は England の Sommersetshire にある村で、17 世紀に Eliot の祖先が住んでいたところである。田舎のイメージを通して視点は、時間の循環、そして時間からの解放を考え、またその困難を実感する。East Coker は周期的変化、つまり四季、生誕と死、建設と破壊などの時間から始まり、遠い昔の村人が盆踊りでリズムをとり踊る、歴史の瞬間に焦点を合わせる。East Coker は時間と変化を強調することで、不動の一点に到達する可能性を否定しているわけではなくて、それに到達することが如何に困難であるかを強調している。

3.1. Owl について

電熱のような暑さの中、麻酔にかかっているように眠っている村。風もなく夏の午後の陽光を浴びている村は、けだるい温気に包まれている。これを空気が対流しない電熱に譬えた、片田舎の風景として次のように描かれている。

And the deep lane insists on the direction
 Into the village, in the electric heart
 Hypnotised. In a warm haze the sultry light
 Is absorbed, not refracted, by grey stone.
 The dahlias sleep in the empty silence.
 Wait for the early owl. (East Coker I)

小道は「電熱の中で催眠術にかかったような」祖先の村を目指し、またその村の昔へと遡って行く。昼下がりの濃い光と影とに彩られた田舎道の風景は、とにかく目覚めたがらない。hypnotised という言葉が、何も動いていない村の睡眠状態を表わすと同時に、夢幻の世界へ入ることを暗示している。暖かいもやの中では、「灰色の石に吸われる暑苦しい光」の元で覚醒したがらず、また「ダリヤは空虚な静寂の中で眠っている」とダリアも何

も語ってくれない、すべてが睡魔に襲われた風景である。だから今は「早起きのフクロウの夜の目覚めを待つ」ほかないのである。

フクロウは『イメージ・シンボル事典』によれば、死との関連から先祖の予言と英知を表わすものとみなされている。また音を立てずに飛ぶ夜鳥であるため、幽霊の鳥といわれる。(p. 476) 早起きのフクロウを待ち、霊が動き出す夜の静寂を待てば、真夜中に昔の先祖たちの村の盆踊りが見られ、村人たちの季節を生きた生活が甦るのである。しかし遠い昔の村人たちの踊りのリズムの音は、耳をよく澄まして聞かなければ捉えらず、近寄ってみると静止点は遠ざかるのである。

時間の焦点は歴史にある。時間の中にある非時間的瞬間への序曲を用意している。Gishは「花々は見たところ日なたで眠っているようだ。生気も激しさも、ここにはない。すべてに動きがない。村へ向かう小道によって指し示される方向がある。電熱の機械化された世界が、ルネッサンス時代の村と併置されている。踊りに興ずる農夫たちのリズムは不動の一点における踊りとは異なって季節のリズムと時の踊りに合わせて拍子をとる。East CokerはEliotの祖先と結びつけて考えられるが、人間の生に新しい意味を持ち、明白な約束を持っていたルネッサンスを思い起こさせる」(p. 104)と説明している。

3.2. Petrelについて

East Coker 第V楽章は、East Cokerの村に戻り、普遍の愛を得ることを中心に幾世代にも亘る過去の人々の生き様に合わせて、生きる重荷を自己に課すことを誓う。場面は荒涼とした海に飛び交う海ツバメ、たくましく泳ぐイルカなど、生命のシンボルが備えられ、主人公の生きる強い決意を表明している。

We must be still and still moving
 Into another intensity
 For a further union, a deeper communion
 Through the dark cold and the empty desolation,
 The wave cry, the wind cry, the vast waters
 Of the petrel and the porpoise. (East Coker V)

年齢を重ねながら、人は「静止し、静止しながら動く」のである。そして波と風との深い交わりを求めて「海ツバメとイルカの広大な海」を通り、時間の循環を完成せねばならない。波が叫び、風が叫ぶ、寂漠とした海の風景であるが、この中の景物はみな生命のシン

ボルである。水や風は古来代表的な生命現象であり、また海ツバメは St. Peter's bird が語源で、ペテロのように歩行するように思えることから、この名前がある。また porpoise (=dolphine) は古代ギリシアでは伝道者の象徴とされ、どちらも生命の象徴となっている。

恩恵が注がれる白光のもと、さらに深い霊的交感のため、人間は探検家でなくてはならない。それは深くて冷え冷えとした荒涼たる道を経て、初めて経験できるものである。East Coker の村で一条の公明と活路を見出し、主人公は決意に燃える第一歩を踏み出そうとしている。

4. The Dry Salvages

The Dry Salvages は Massachusetts の Cape Ann 沖にある岩礁群の名前に由来し、そこは Eliot が幼年時代を過ごしたところである。時間は行き着く先も目的もない無限の流れであり、不断に変化する大洋として描かれる。海は生命の源であり、清めの水であり、また破壊力でもある。

The Dry Salvages では、海のイメージを通して時間の問題を取り上げ、また逆に時間について論じながらまた海に戻っていく。この詩の時間論は、未来の過去性、つまり未来もやがては過去となる性質のものであることを述べている。Gish は「広漠として非人間的な本性を持つという観点から描かれている海は、無限の時間を表わす中心的なイメージとなっている。海は私たちの時間よりも、もっと広大な時間を暗示するさまざまなものを岸に打ち上げる。海は破壊的であり際限もなく難破船の残骸を運んでくる。その動きが絶え間ない流動、あてどない無限の時の動きであって精密時計で計る人間の時間ではなく、遠くの嵐や地震が引き起こす底波、あるいは大きくうねる波の動きの時間である」(p. 108) と論じている。

4.1. Seagull について

カモメが鳥として、それ相応の文学的賞賛を受けるには、Eliot の詩が登場する今世紀を待たねばならなかった。Eliot は Gerontion で「吹きすさぶ海峡の向かい風のカモメ」(Gull against the wind, in the windy straits) について述べている。また、Cape Ann では岩暮れだった海岸が、「その真の所有者、たくましき者、海カモメ」(To its true owner, the tough one, the seagull) の住み家であるとみている。また The Dry Salvages では、海カモメが次のように描かれている。

The sea howl
 And the sea yelp, are different voices
 Often together heard: the whine in the rigging,
 The distant rote in the granite teeth,
 And the wailing warning from the approaching headland
 Are all sea voices, and the heaving groner
 Rounded homewards, and the seagull. (The Dry Salvages I)

海の声が、海の怒号や海の悲鳴として聞こえる。海の声は一様に聞こえるが、実は別々の声で「索具の哀れな声、水面に砕ける波の威嚇の声や愛撫の声、花崗岩に砕け散る遠い波の音、近づく岬の警笛の鳴る声」と実に様々な海の声が入り混じっているのである。また「母港のほうを向いたブイの唸りも、かもめの声」もすべて海の声である。岬の突端に取り付けられ、近づく岬から聞こえてくる泣きわめくような警報を発する警報機は、濃霧や嵐の来襲を警告する一種のサイレンである。また大波のため母港の方に向けて浮き上がった吹鳴ブイ (groner) も唸っている。これらの多様な声は共に海の具体的表象といえる。そしてそこには太古からの歴史を記す創造と破壊の音が宿っている。

世界中をめぐる海流は世界の神々を宿している。海が持つ魔力や不気味な力が、実にさまざまな声の繰り返して表現されている。海は人間世界を取り巻く外的世界であり、無限に広がる時間と空間であり、また破壊的な力がある。水による消滅は浄化と再生への道であり、ここでは時間からの開放を海に託し、海による救済が暗示されている。

5. Little Gidding

Little Gidding は、17世紀に Nicholas Ferrar 一族が敬虔な祈りの生活を送ったところで、時間的なものと非時間的なものが好ましい関係にあるといえる場所である。時間が祈りによって様式化され、非時間を反映しているといえるに相応しい所である。

Little Gidding の中心的な詩的象徴は火である。火は燃えて人間を壊滅させる力を象徴し、また神から与えられる浄火でもある。Little Gidding は浄めの火のイメージが顕著で、5句節のペンテコステの火 (pentecostal fire)、すなわち聖霊の象徴としての火を暗示している。神が人間に対して語りかけるときの言葉がこれで、転じて死者が生者に語りかけるときも火の舌をもってする。ここでは主人公が非時間的瞬間を体験し、神の愛を確信する。

この詩における火のイメージを連想させる戦争について、Acroyd は「Eliot 自身、ドイ

ツ軍の空襲の恐怖を経験したが、そうした実際の経験を表現している。毎夜の爆撃、瓦礫の山で塞がった通り、その都会のいたるところで発生した火災による夜の明るさ、廃墟となった建物の臭い。彼の生活も国全体の沈滞や恐怖に飲み込まれていた」(p. 264)と Eliot 自身の個人的体験によるものであると言う。

5.1. Dove (= the dark bird) について

Little Gidding 第2楽章は焚火をしている老人の風景で始まる。老人は記憶の中でバラの花の灰を指でかき回す。その度に舞い上がる灰。静寂な空気に透けて見えるこの灰塵が、ドイツ空軍によるロンドン爆撃後の廃墟を思い起こさせる。第2次世界大戦中に夜間爆撃を受けたロンドンの惨状は悲劇の象徴である。戦争は恐るべき破壊力を発揮してすべてを死へ追いやる。ドイツ空軍の爆撃機を「黒いハト」(the dark dove) と次のように描いている。

In the uncertain hour before the morning
 Near the ending of interminable night
 At the recurrent end of the unending
 After the dark dove with the flickering tongue
 Had passed below the horizon of his homing
 While the dead lives rattled on like tin
 Over the asphalt where no other sound was
 Between three districts whence the smoke arose
 I met one walking. (Little Gidding II)

果てしなく続く長い夜、空襲のため夜が長く感じられる。その夜もいよいよ終わろうとする夜明け前の不確かな時刻頃に、破壊をもたらす火を吹くドイツ空軍の爆撃機が、黒いハトのように急降下して突進してくる。その黒いハトの「ちらちらする舌」(the flickering tongue) は、爆撃機からの爆弾や機関砲の火を表している。そしてロンドンの夜間爆撃後、爆撃機が地平線のかなたへ飛び去る姿を「巣を目指して去った後」と、ハトの帰巢に譬えている。

「煙の上がる三つの地区を行き来しながら、枯葉ががさがさと銀紙のように飛んでいる」と路上に枯葉の音だけを残して、爆撃機が飛び去った後、主人公は歩いてくる人に出会う。ここに死者との交わりの瞬間が祈りによって達成される。真の祈りのうちに死者の霊

が火の舌で語るのが聞かれることから、戦時下のロンドンと対峙する、もう一つの世界を想定しているのである。

5.2. Dove (= pentecostal fire) について

Little Gidding 第4楽章で、ハトは聖霊の象徴となる。ハトの火はドイツ空軍の爆撃機のイメージだけでなく、ペンテコステの火に象徴される聖霊と重なる。その火をクローズアップし、2種類の火のうちの選択を迫られる様子が次のように描かれている。

The dove descending breaks the air
 With flame of incandescent terror
 Of which the tongues declare
 The one discharge from sin and error.
 The only hope, or else despair
 Lies in the choice of pyre or pyre -
 To be redeemed from fire by fire. (Little Gidding IV)

ハトが聖霊の象徴となって舞い降りてくる。爆撃機としてのハトが「白熱の恐怖の炎を上げて、舞い降りつつ空を切る」のであるが、それはすでに聖霊のハトで、炎の舌が「罪と過ちからの唯一の放免」を宣言する。ここではハトがドイツ空軍の戦闘機のイメージと併せて、5句節のペンテコステの聖霊の火を思わせる聖霊のイメージも暗示し、爆撃機の火が5句節の火に溶け込んでいる。その炎の舌は、白熱の火によって罪も過ちも焼き切る。爆撃機のハトが聖霊のハトと二重写しになることで、破滅の火はまた救いの火でもあり、火によって火から救われるという意味を持つてくる。つまり浄化の火によって救われることになるのである。pyre は火葬用の薪であるが、壊滅させる薪と欲望の炎を燃え上がらせる薪のことも意味している。唯一の希望になるか、絶望になるかは2種類の薪の「積み薪か積み薪かの選択」により決定される。

『イメージ・シンボル事典』によれば、ハトは鷺とともに大空一天国を表わすもっとも基本的な象徴の一つで、力よりも清浄、無垢、聖霊、神託、復活、再生、愛を表わす。(pp. 184-185) この詩はロンドンの街々を焼き尽くすドイツ軍機の火をハトの舌に見立て、戦争の愚行から人間および文明が清められるには、白熱の火によって焼き尽くされ、地獄の火から神の愛によって救済されなければならないという、宣言である。これが人間を罪と過ちから救済する唯一の手段であり、ハトに象徴される聖霊の訪れは、神の愛が常に存

在していることを表わしていると考えられる。

6. 結語

Four Quartets の4編の詩は、時間と非時間（永遠）について、時間の中で非時間に接することを願い、主人公、私は現実を新しい気概をもって生きていく決意を表している。Burnt Norton は、永遠に現在であるものとしての時間の考察で幕を開け、時間の中において非時間的瞬間として原初の世界であるバラ園を発見することにある。East Coker は生誕と死の時間で始まり、農夫たちがリズムを保ちながら踊る歴史の瞬間に焦点を合わせる。The Dry Salvages では、時間は行き着く当てもなく目的もない無限の流動であって、絶え間なく変化する大洋として描かれている。最後の Little Gidding では戦火を通して、現在の内部にある非時間的瞬間の認識へと戻るのである。

時間と非時間が交差する瞬間として認識される、時間と非時間の交点（“The point of intersection of the timeless,” The Dry Salvages V）が、さまざまな詩的心象を用いて描かれている。非時間的瞬間に触れることを可能にするのは、回る世界の静止点（“At the still point of the turning world,” Burnt Norton II）、つまり神においてである。Gishが「非時間的瞬間を回復する可能性を思い巡らし、それが存在することを肯定している」（p. 97）と言うように、非時間的瞬間は常に時間の中に存在している。そしてそのことを認識するには、自己棄却によって愛に生き、それを常に求め続けるうちに、神から恩恵的に与えられるものであることを示唆している。時間の中の人間が非時間的瞬間に触れるには、神の愛の導きによるほかない。この詩はこのことを踏まえつつ、バラ園のこだまとの出会いに促され、祖先の地を訪ね、悠々の海に対峙する岩礁のほとりに立ち、旅路の果ての地でその成就を祈るのである。

Four Quartets で Eliot が用いた技巧のうち、鳥が表わす意義を考えた。Dove, Thrush, Owl, Kingfisher, Petrel, Seagull は、それぞれの情景で的確に描かれ、詩に重要な意味を暗示していた。鳥のイメージが、時間と非時間的瞬間の認識のテーマと関連して、より明確な視的イメージや彩りを与え、詩の印象を深めるのに役立っていたと考えられる。

参考文献

Ackroyd, Peter. *T.S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.

Bergsten, Staffan. *Time and Eternity*. New York: Humanities Press, 1973.

- Eliot, T.S. *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1978.
- Gardner, Helen. *The Composition of Four Quartets*. London: Faber and Faber, 1978.
- Gish, Nancy. *Time in the Poetry of T.S. Eliot*. London: The Macmillan Press Ltd, 1981.
- アト・ド・フリーズ『イメージ・シンボル事典』山下主一郎（主幹）大修館、1974年。
- ピーター・ミルワード『聖書の動物事典』中山理（訳）大修館、1992年。
- ピーター・ミルワード『英文学のための動植物事典』中山理（訳）大修館、1990年。
- 森山泰夫『四つの四重奏曲』大修館、1980年。